

実習生の教育課程・保育課程の理解と子ども理解 —「人間関係」に関わる事項を中心として—

石川 洋子*

Student Teachers' Understanding of Curricula and Children: Focusing on the Area of "Human Relationships"

Hiroko ISHIKAWA

要旨 実習生の教育課程、保育課程の理解と子ども理解、また今後の実習指導のあり方を検討するために、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース4年生52名を研究対象とし、筆者が作成した保育課程を基に、主に「人間関係」に関わる事項を中心として、それへの気づきや保育者の実践について、質問紙調査を行った。「人との関わり」「思考・イメージ」「表出」「自立」の4区分ごとに、実習生の気づきがあった割合を見てみると、外側から見やすい「自立」の項目や「人との関わり」に関する気づきは比較的高くなっていて、子どもの気持ちや意図といった内面を読み取り、理解することは難しかったようである。「思考・イメージ」の項目に対する気づきは低く、実習生に、意識して子どもたちの言動やその意味や意図を推し測ったり、思考やイメージをふくらませる大切さを教えていく必要があると思われた。

印象に残った保育者の実践を記述してもらったが、「人との関わり」への援助に関する記述が4区分中最も多くなっており、これは、実習生が気づきやすい領域と言える。この保育者の実践を多く記述したものに、「人との関わり」の各項目への自身の気づきも多いという結果も見出された。実習生に教育課程、保育課程の大切さを知らせ、その内容をていねいにチェックしていくこと、子どもの内的な気持ちや意図も含んだ子ども理解と保育課程の先を見通した保育者の実践をていねいに重ね合わせ、自分の将来への実践につなげていけるような実習指導の方策が重要であると言える。

キーワード：教育課程 保育課程 実習生 人間関係 子ども理解 保育者養成

I 研究目的

幼児教育や保育へのニーズ、関心の高まりと共に、幼稚園や保育所における教育課程、保育課程の重要性が大きく指摘されている。実習生をかかえる保育者養成側にとっても、これをいかに学生に伝えるか、実習の場での子どもとの関わりの中で、子ども理解、保育理解をいかに進めるかは大きな課題であると考える。

高橋等¹⁾は、幼稚園教育におけるよりよい環

境を創造することとして教材研究を位置づけ、実習生の教材研究への習熟度からこれを2群に分け、習熟をしていると自己評価している者の方が、実習体験に高い満足度を示すこと、また保育者の指導の意図の理解や援助の仕方を把握しているという者が有意に多いことを見出した。さらに、子どもの思いや気持ちのくみ取りなどでも習熟をしている者の方が達成度が高いことも報告している。

これは実習前後の指導の重要性を指摘したものであるが、筆者も子どもたちの現状やこれから

*いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

の幼児教育のあり方などを考慮しながら、教育課程、保育課程を作成してきたが、今回、実習生に対してこの重要性をどう伝え、実習の体験とどう合わせていけばいいか課題と考え、主に「人間関係」の領域を中心にこれを検証した。

II 研究方法

1 研究対象

教育課程、保育課程への理解と今後の実習指導のあり方を検討するために、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース4年生52名を研究対象とし、筆者の作成した教育課程、保育課程をもとに、そこに含まれる各事項について質問紙調査を実施した。4年生52名の内訳は、男子2名、女子50名（男子3.8%、女子96.2%）である（回収率100%）。

なお、本学生は、一部の者を除き、幼稚園教育実習と保育所実習と共に経験している。調査時期は、2015年7月である。

2 教育課程、保育課程の項目と質問内容

筆者が作成した教育課程、保育課程は、下記のように大きく4つの区分に分け、それぞれ6か月未満、6か月～1歳3か月未満、1歳3か月～2歳未満、2歳、3歳、4歳、5歳、6歳の年齢別に項目を設けている。

- I 人との関わり
- II 思考・イメージ
- III 表出
- IV 自立

I 人との関わり

人との関わりに関する項目は、保育者と安心して関わる、ものを媒介に友だちと関わる、友だちとのつながりを広げようとする、目的をもって集団で行動するなど、人間関係に関する34項目である。

II 思考・イメージ

思考・イメージに関する項目は、盛んに模倣する、象徴機能や観察力を発揮して遊びを発展させる、予想、意図、期待をもって行動できる、数える、比べる、分ける、集めるなど、70項目である。

III 表出
表出に関する項目は、身体を十分に動かして遊ぶ、経験したこと、思ったこと、感じたことを言葉で表現する、言葉、文字、数量的な関係を組み合わせるなど、47項目である。

IV 自立

自立に関する項目は、始歩、押す、つまむ、走るなどの運動機能、食事、排泄、着脱衣がほぼ自立、安全に過ごすためのきまりがわかるなど、34項目である。

質問では、上記の各項目について、実習中、それぞれの年齢で見聞きしたかどうかをチェックをしてもらった。また各項目について、印象に残った、保育課程の先を見通した保育者の実践を自由記述で記してもらった。

III 結果と考察

1 教育課程、保育課程の各項目への気づき

実習生の教育課程、保育課程4区分への気づきの差をみるために、各区分ごとにチェックされた項目の割合を年齢ごとに比較したものが、図1である。これは、実習生が体験しなかった年齢もあるため、各年齢での実習体験者数からみたチェック数（気づき）の割合となっている。

チェックされた割合を区分ごとに見てみると、全体として「自立」の項目が高くなっているのがわかる。運動機能や基本的な生活習慣など、自立に関する項目は、外側から見やすい、理解しやすい事項であることがその理由と考えられる。

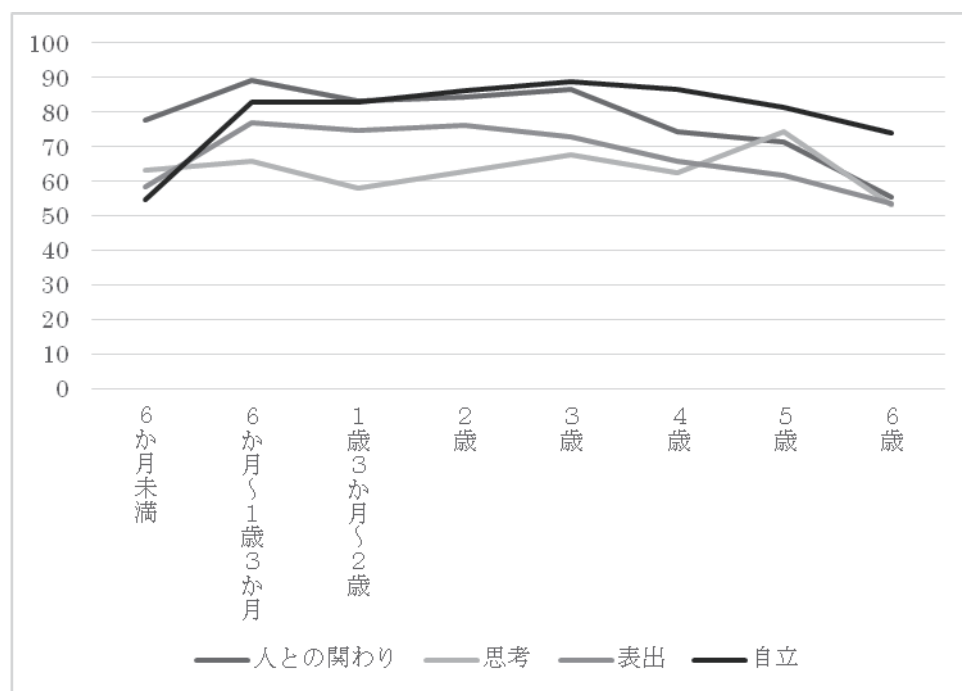
また、「人との関わり」に関する気づきも比較的高い割合となっているが、年齢が上がるにつれて、その割合が下がる傾向も見られた。

一方、「思考・イメージ」の項目に対するチェックの割合は、他の項目に比して低くなっている。

子どもたちがイメージをもって遊んでいるか、予想や意図をもって行動しているかなどは、外側からは見えにくい項目である。意識して子どものたちの言動やその意味、意図を見聞きし、推し測っていかないと理解しにくいと思われる。しかし一

方、思考やイメージへの理解、そのための教育的配慮や援助は重要である。実習前後の実習生への指導を工夫し、思考やイメージへの気づきが進むようにすることは、我々保育者養成側の課題となる結果である。

図1 教育課程・保育課程4区分の気づきの割合



2 「人との関わり」の項目の気づきの分析

実習生は、「人との関わり」に関する項目について気づく割合が多い結果であったが、一方、年齢が高くなると下がる傾向も見られたので、この「人との関わり」に関するものを年齢ごとに分析をすることとした。

図2は、子どもの年齢が1歳3か月～2歳未満の「人との関わり」に関する各項目のチェックされた割合であるが、「保育者と安心して関わる」「人ともものやりとりをする」は、93.5%、80.4%であるが、「周囲の子どもに関心をもち関わろうとする」の項目は、76.1%と少し下がっていた。この項目は、子どもの表情や意欲を読み取らないと気づけない項目である。

また、図3は、4歳児の項目であるが、「人と

の関わりがもててくる」「友だちが見つかる」「ものを媒介に人と関わる」などの項目は、それぞれ94.0%、92.0%、80.0%と高くなっている一方、「人の気持ち、動き、考えが見える」「友だちとのつながりを広げようとする」の項目は、56.0%、54.0%とおよそ半数の実習生が気づいたにすぎない。

相手と関わろうとするなどの人間関係に対する子どもの気持ちや意図といった内面は、個人差などの影響もあるものの、子どもの表情や言動を読み取りながら推し測っていかねばならず、経験の少ない実習生にとっては難しいものである。年齢が上がるに従い、チェックされる割合が下がったこともこのような理由によるものかもしれない。しかし、この気持ちや内面を読み取ることは、人との関わりを広げる援助につながるもので

ある。実習生にその場面をどう気づかせ、援助する力をどうつけていくのか、課題となる結果である。

図2 「人との関わり—1歳3か月～2歳未満」の各項目へのチェックの割合

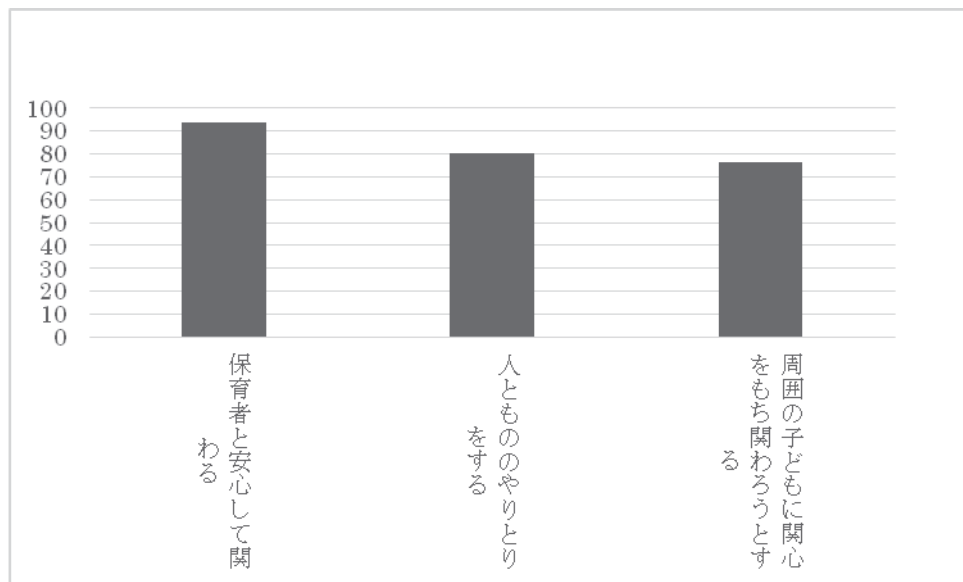
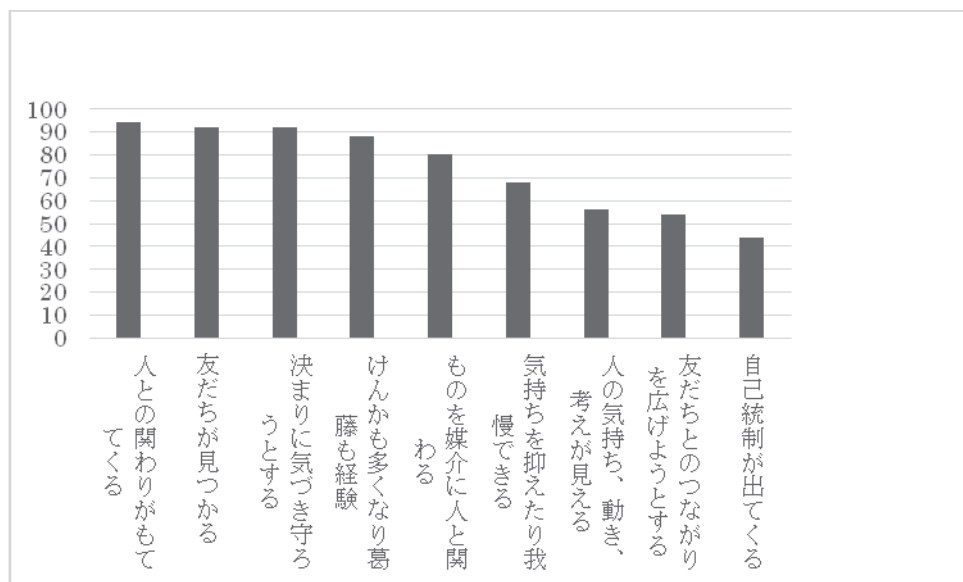


図3 「人との関わり—4歳」の各項目へのチェックの割合



3 保育者の実践の記述

保育実習の中で、学ぶべき目の前の保育者の実践の意味をどうとらえ、どう気づくかは、実習生の大きな課題である。そこで、教育課程、保育課程の4区分において、それぞれ印象に残った保育

者の実践を自由記述で記してもらった。

表1は、4区分ごとの実習生が気づいた保育者の実践の記述数の比較である。保育者の「人との関わり」への援助に関する記述が、平均3.8件

あり、4区分中最も多くなっている。「人との関わり」への援助は、実習生が気づきやすい分野であると言える。

表1 4区分における保育者の実践の記述数

	人との関わり	思考イメージ	表出	自立
平均	3.8	2.6	1.2	1.1
SD	3.02	2.55	1.46	1.38

表2は、実習生の気づいた保育者の実践について記述された主な内容である。「人との関わり」

では、保育者と人間関係を築き、また友だちとの関係を作り広げるような子どもの年齢に応じた保育者の援助が記されている。「思考・イメージ」においては、概念形成やイメージを広げるための言葉かけが記述されている。「表出」では、遊びの中で表出が進むような言葉かけ、「自立」では、子どもが自立を目指すための細やかな援助について記述されていた。実習生は、教育課程、保育課程を見通した保育者の実践にそれなりに気づいている結果であった。

表2 4区分における保育者の実践への記述内容例

I 人との関わり
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一対一の関わりを大切にしていた。(0歳) ・ 友だちと同じ物を使っていたら「同じだね」と声をかけていた。(1歳) ・ おもちゃを取り合っているとき、両方に共感的な声かけをしていた。(2歳) ・ 一緒に遊ぶことを楽しく思えるような声かけをしていた。(3歳) ・ 仲介の場面で「どうしたらよかったかな」と自分で考えられるような援助をしていた。(4歳) ・ 集団で遊ぶことを楽しく感じられるような遊びを多く提供していた。(5歳)
II 思考・イメージ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ色のブロックを集めているとき「○色を集めているんだね」と意識できるようにしていた。(2歳) ・ 絵本を通してイメージを広げられるようにしていた。繰り返し名称なども伝えていた。(2歳) ・ ペーパーサートの際、今後の展開を予想させるような言葉をかけていた。(3歳) ・ 「自分で考えなさい」と子どもに伝えていた。(5歳)
III 表出
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ワンワン」などの言葉に「ワンワンいたね」など補いながら言葉をかけていた。(1歳) ・ 「そういう時は○○と言うんだよ」と教えてあげていた。(2歳) ・ ごっこ遊びの中で会話をすることの楽しさを感じさせていた。(3歳) ・ みんなの前で発表する場を作っていた。(4歳)
IV 自立
<ul style="list-style-type: none"> ・ 歩けるようになった子に普段とは異なる環境でも歩けるように練習させていた。(0歳) ・ 排泄などできたときは、みんなで拍手して「やったね」と声をかけていた。(2歳) ・ できるだけ自分でやるように、決して急かさず待つてあげていた。(5歳) ・ 頼みごとをしたり役割を与えたりして達成感を感じられるようにしていた。(5歳)

4 保育者の実践の記述と実習生の気づきの関係

保育者の実践の記述と実習生の各項目への気づきの関係を探るため、「人との関わり」の区分における保育者の実践の記載数の平均値をもとに、記載の多いもの「保育者実践の記載多群」と少ないもの「保育者実践の記載少群」の2群に分けた(表3)。

表3 「人との関わり」の区分における保育者の実践への記述の多少による2群の分類

	平均値	N	SD
保育者実践の記載多群	6.4	24	2.37
保育者実践の記載少群	1.5	28	1.11
	3.8	52	3.02

この保育者の実践への記述の多少により、各項目へのチェック数、つまり実習生の気づき数との関連について、平均値の差の検定を行ったところ、保育課程の先を見通したような保育者の実践を多く記述したものの方に、「人との関わり」の各項目への実習生自身の気づきのチェックも多いという結果であった(表4 $p<.001$)。

一方同様に「思考・イメージ」など他の区分についても平均値の差の検定を行ったが、そちらでは差は見られなかった。

実習生は「人との関わり」に関する子どもや保育者の動きには敏感であり、また「人との関わり」の区分の中でも、保育者の実践をより多く記述できるものに、子どもの言動やその内面に気づけることが多いという結果である。実習生を指導する場合、保育者の実践をより多く見て、記載できること、それが保育課程の先をどう見通したものであるかが理解できることが、よりよい子ども理解や気づきにつながるものと思われる。

表4 保育者の実践の記述群別気づき数の平均(「人との関わり」において)

	平均値	N	SD	t値
記載多群	25.46	24	4.87	-3.466 ***
記載少群	18.89	28	8.10	

*** $p < .001$

5 教育課程、保育課程への理解

(1) 教育課程、保育課程への理解

実習生に、各実習園における教育課程、保育課程への理解や自身の実践への自信などを尋ねた。実習園の教育課程や保育課程は、約90%の実習生が多少とも見る事ができたと答えていた。

教育課程、保育課程への理解などを尋ねたものが表5である。いずれの項目に対しても高い数値を示しているが、「養護的関わりをみることができた」「養護的視点が理解できた」の項目に比して、「教育的関わりをみることができた」「教育的視

点が理解できた」の項目の方が、それぞれ低くなっている。実習生にとって、教育的な関わりや視点への理解の方が難しいと思われる。

表5 実習園で得られたこと

	とてもそう	少しそう	どちらともいえない	あまり全くそうでない %
養護的関わりが見られた	70.6	27.5	2.0	
養護的視点が理解できた	39.2	52.9	7.8	
教育的関わりが見られた	49.0	43.1	5.9	2.0
教育の視点が理解できた	21.6	64.7	7.8	5.9

一方、教育課程、保育課程の大切さやこれへの理解はできたと答えている実習生は、約90%と高い数値になっていた。しかし、自分の実践への不安は持っているようであった。「養護的関わりや教育的関わりができるかどうか心配か」という質問に対し、「とても・少しそう」と答えている実習生は、62.7%、70.6%おり、とくに教育的関わりへの不安を持っているようであった(表6)。

表6 将来自分が養護的関わり、教育的関わりができるかどうかへの心配

	とてもそう	少しそう	どちらともいえない	あまり全くそうでない %
養護的関わり心配	17.6	45.1	17.6	19.6
教育的関わり心配	25.5	45.1	17.6	11.8

(2) 「人との関わり」項目への気づきと将来への不安

「人との関わり」項目への気づきと将来の教育的関わりへの不安の関連を見るために、「人との関わり」項目へのチェック数、つまり気づき数の平均から、「気づき数多群」と「気づき数少群」の2群に分け(表7)、群ごとに、将来の自分の

教育的関わりへの不安を見ると、気づき数の多いもの、つまり「人との関わり」項目への気づきが多いものに、不安が少ない結果であった（表8 $p<.05$ ）。

表7 「人との関わり」項目へのチェック数の多少による分類

	平均値	N	SD
気づき数多群	27.1	30	3.30
気づき数少群	14.8	22	5.50
	21.9	52	7.51

表8 「人との関わり」項目への気づきと将来教育的関わりができるかへの不安の関連

	教育的関わりができるか心配			
	とてもそう	少しそう	どちらともいえない	あまりそうでない
気づき数多群	26.7	30.0	30.0	13.3
気づき数少群	23.8	66.7	0.0	9.5

* $p<.05$

これらの結果を見ると、実習生に教育課程、保育課程の大切さを知らせ、その内容をていねいにチェックし気づかせること自体が大切であると言える。そしてその際にも、子どもの外側に現れた言動ばかりでなく、子どもの内的な気持ちや意図を含んだ子ども理解と、保育課程の先を見通した保育者の実践をていねいに重ね合わせ、振り返り、自分の将来への実践につなげていく方策が重要であると言える。

IV まとめ

実習生の教育課程、保育課程への理解と実習生の子どもの理解、さらには今後の実習指導のあり方を検討するために、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース4年生52名を研究対象とし、筆者が作成した保育課程に基づき、それへの気づきや保育者の実践について、質問紙調査を実施した（回収率100%）。

「人との関わり」「思考・イメージ」「表出」「自立」の4区分ごとに、チェックされ気づきがあった割合を見てみると、「自立」の項目が高く、外側から見えやすい項目に気づきが多かった。「人との関わり」に関する気づきも比較的高い割合となっていたが、年齢が上がるにつれて、下がる傾向も見られ、人間関係に対する子どもの気持ちや意図といった内面を理解することは難しいと考えられた。「思考・イメージ」の項目に対する気づきは低く、実習生に、意識して子どものたちの言動やその意味、意図を見聞きし、推し測って理解を進める手立てを教えていく必要があると思われる。

印象に残った保育者の実践を記述してもらったところ、「人との関わり」に関する記述が4区分中最も多くなっており、実習生が気づきやすい領域であると言える。

また、保育課程の先を見通した保育者の実践を多く記述したものに、「人との関わり」の各項目への気づきも多いという結果であった。

さらに、「人との関わり」項目への気づきが多いものに、将来の自分の教育的関わりへの不安が低いという結果も出ており、実習生に教育課程、保育課程の大切さを知らせ、その内容をチェックしていくこと、子どもの内的な気持ちや意図を含んだ子ども理解と保育課程の先を見通した保育者の実践をていねいに重ね合わせ、自分の将来への実践につなげていけるような実習指導の方策が重要であると言える。

引用文献

- 1) 高橋裕子, 大瀧ミドリ, 今村聡美「幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について」東京家政大学研究紀要, 第51集(1), 2011, pp7-13
- 2) 「幼稚園教育要領」文部科学省, フレーベル館, 2008
- 3) 「保育所保育指針」厚生労働省, フレーベル館, 2008

- 4) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, 内閣府・文部科学省・厚生労働省, フレーベル館, 2014

参考文献

- 1) 大西慶一「教育課程・保育課程の編成と保育内容環境：保育と幼・小連携における環境デザインと教育課程・保育課程編成法とその実践」日本教育情報学会第28回年会, 28, 2012, pp62-65
- 2) 岸井慶子「見えてくる子どもの世界, ビデオ記録を通して保育の魅力を探る」ミネルヴァ書房, 2013
- 3) 鯨岡峻「エピソード記述入門, 実践と質的研究のために」東京大学出版会, 2005
- 4) 無藤隆「共同するからだことば, 幼児の相互交渉の質的分析」金子書房, 1997
- 5) 矢野智司「意味が躍動する生とは何か, 遊ぶ子どもの人間学」世織書房, 2006